

June 18, 1971 兵庫県佐用町へ遠征

中学時代に文通による交換によって、鳥取伯耆大山のジョウザンミドリシジミやエゾミドリシジミを標本として送ってもらっているが、自分の目で生きた姿をみたいものだ、と社会人となって神戸市に住み始めた 1971 年の 6 月、上郡から深く入った佐用町久崎というところに行けばヒロオビミドリシジミを筆頭にゼフィルスがたくさんいるようだ、という漠然とした情報だけをたよりに早朝の一番列車で神戸から上郡、上郡からは路線バスで久崎方面へと向う。この時期、沿線千種川でのアユ釣りが解禁となっていて、バスの乗客の多くは釣竿をもった中年の男性で、ゼフィルス採集用のつなぎ棹を入れた袋をもつ筆者も、アユ釣り目的のひとりだとみられているのは疑いない。そんななか、筆者と同じく佐用町にゼフィルスを採りに行く大阪からのご夫婦がおられて、当方のいでたちが釣りではなくて蝶採りだとみぬいて話しかけてくれ、ラッキーにも佐用町に何度か来ていてゼフィルスに出会える場所を知っているので案内してくれるという。ご主人のお名前は伊沢格さん。一般に、蝶採集地で目的を同じとする同好者にであうと、お互いがライバルであり、けん制しあうものだが、伊沢さんはヒロオビミドリシジミの生きたメスを捕らえて採卵することを主目的としているとのことで、伊沢さんのおかげで目的地に最も近いというバス停で降りることができる。橋の手前から土手沿いに歩くうち、すぐにジャコウアゲハの発生場所を教えてくれる。ウマノスズクサが土手の斜面に多く、ちょうど幼虫の時期であちこちにその姿をみつけられるが、ここは帰りに寄ればいからと、先へと進む。30 分ほど歩いたのだろうか、ナラガシワ林が密度濃く広がる上秋里駐在所がある地点で、お互いに分散行動へと移り、それぞれがここぞと思う場所を探して雑木林へと分け入っていく。

本格的なゼフィルス採集は初めての筆者は、どういう環境が好ましいのか判断基準をもたないまま、できるだけ林の中の高い位置に出て枝葉の先端部を見下ろすのがいいだろうと、斜面の適当な位置に足場を確保してチョウの動きに注意をはらう。すると、ミドリシジミのなかまだと分かる小さなチョウがちらちらと飛ぶ空間が目に入る。ゆるやかな斜面に林立するナラガシワの枝が適度にその空間にのびて、その先端葉先でシジミチョウがテリ張りをしているらしい。時刻は 10 時前。蝶の図鑑からの知識ではこの時間帯に活動するのはヒロオビミドリシジミかメスアカミドリシジミ。今はナラガシワ林だから前者だ。そっとネットをのぼして葉っぱの下方からすくいあげると簡単に採れる。やはりヒロオビミドリシジミのみで、野外で活動しているだけに鱗粉が完全な新鮮度ではないけれど、初めてみる金緑色の光沢にうっとりする。しばらくすると、同じ葉っぱに新たなオスがやってきて同じように開翅テリ張り体勢をとる。どうやら最良のポイントを探り当てたようだ。筆者が足場を得た場所は、ナラガシワのかなり上の位置のためか、ときおりずっと下の方で長棹の先で白いネットがゆれ動くのがみえる。伊沢さんではなく他の同好者が同じ目的でやってきているのだ。絶好のポイントをみつけたおかげで 7 頭のはほぼ新鮮なオスを捕獲して場所を移動する。伊沢さんは、メスはナラガシワの枝が入り組んだようなところにいるはず、とオスの捕獲にはまったく関心がない。筆者もメスができれば生かしたまま提供しますね、と背が高くないナ



June 18, 1971  
兵庫上月町

ラガシワの茂みにも注意してみる。まもなくまちがないメスがみつきり、伊沢さんに知らせて喜んでいただく。

## June 8, 2002 久しぶりの再会

加古川の里山・ギフチョウ・ネットの立岩さんが佐用町でナラガシワの樹が残るポイントへと案内をして下さり、実に 31 年ぶりにヒロオビミドリシジミとの再会を果たす。ミドリシジミの仲間はそれぞれ活発に飛び交う時間帯が違っていて本種の活動時間は午前 10 時頃からで、木々



の梢周囲を飛び回り、高い位置の葉上でテリ張りをする個体はすべてオス。メス個体はナラガシワの葉陰とか入り組んだ小枝に静止していることが多く、この日は下草が茂る草むらのケネザサにとまる個体を撮影記録。立岩さんが 5m 以上の



長竿でナラガシワの大木梢まわりを飛ぶオス個体をネットインして提供してくれたのが上に示す標本で、その後は標本作成を目的とした本種の採集はしていない。